

新潮文庫

高安犬物語

戸川幸夫著



新潮社



素^す 足^{あし} の 娘^{むすめ}

定価 220 円

新潮文庫 草 82 B

昭和三十六年七月三十日 発行
昭和五十六年九月三十日 三十刷

著 者 佐^さ 多^た 稲^い 子^こ

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四〇
振替 東京 四 一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

高 安 犬 物 語

戸 川 幸 夫 著



新 潮 社 版

1326

目次

高安犬物語	七
熊犬物語	六
北へ帰る	九
土佐犬物語	一九
秋田犬物語	一七

解説 細川 忠雄

高安犬物語

高安犬物語

一

チンは、高安犬^{こうやすいぬ}としての純血を保っていた最後の犬だった、と私はいまもって信じている。

高安犬というのは山形県東置賜郡高畠町^{ひがしおいたま たかはた こうやす}高安を中心繁殖した中型の日本犬で、主として番犬や熊獵犬に使われていた。中型の日本犬とはいっても紀州犬やアイヌ犬のようにスマートな、女性的なのと異なっていて、犬張子^{いぬはりこ}を思わせるガッチリとした体つきの、戦闘的な狩獵犬^{またぎいぬ}だった。熊を追って幾日も幾日も雪山を彷徨出来る強い耐久力と、相手が斃れるまで食い下る激しい闘魂、鼻を挽ぎとるような寒風の中から熊の体臭を嗅ぎわけ鋭い感覚——こういった類のない特徴を持った狩獵犬だった。だがその優秀な血も怒濤のように押し寄せてくる垂耳犬^{たれみみいぬ}の汚れた血で次第に崩されてゆき、昭和の初めごろにはもう高安犬の発祥地である高安付近では、耳は立ち尾は巻いていても、どことなくバタ臭い犬で充満し、あの美しい古武士のような重みのある高安犬の姿は見られなくなっていた。

当時この高等学校の理科に学んでいた私は、純血の高安犬が残存しているという奇跡を信じ、日曜毎に自転車を駆って県下の山村僻地を経巡^{へめぐ}っていた。私が高安犬に強く心を惹かれたのは、

一口にいえば「亡びゆく種族」への愛惜に外ならない。だが当時の私の気持は「愛惜」という言葉だけでは言い現わし得ない、もっと強い、つきつめられたものを感じていた。この「種」を滅してはいけない——と叫びたいような念願だったといえる。

もともと九州に生れ、九州に育った私がこんな遠い東北の高等学校に籍を置くようになったのも動物学、それも東北帝大にだけしかなかった古生物学科を志望していたからである。私は子供のころから動物が好きだった。玩具よりも蜘蛛や百足虫を欲しがって、ほんにこの子アどぎゃんなッとじゃろか、と祖母を嘆かせていたそうだ。中学生になったころは蛇や蜥蜴とかげをこっそり家中に持ち込んだり、押入れの中を拾ってきた動物の骨で一ぱいにして両親を呆れさせたものだった。

生きた動物の好きだった私が「絶滅した種」を研究する古生物学に興味を持つようになったのは、科学博物館に勤めていた従兄に負うところが多い。従兄はここで地質学部門を担当していたのだが、ある夏帰省したおり、中学生の私にいまから何千万年という昔、地球上をわがものの顔に歩き回っていた巨大な竜の話をしてくれた。その印象は強く私の脳裏に刻み込まれた。私は小遣を貯めてはそういった参考書を買集め「失われたる世界」に遠く想を走らせるのだった。

私の父はいわゆる政商で、政党に献金しては旨い仕事を分けて貰っていた。父の頭を常に支配しているのは政界がどのように動いて、その結果どの方面の仕事が活発になるか、ということだけだった。なんちゅうたっちゃあ、男の仕事あ政治家ばん。一国の運命ば左右すッとじゃッけんのう——これが父の口癖だった。九州の片田舎の水呑み百姓の俵に生れた父は政治家を志した。

だが頼るべき筋も、背景も持たなかった父はまず蓄財することだと考えた。Y製鉄所を振り出しにO商事、そして独立、どうやら代議士戦に打って出る準備が出来た時にはもう年を取りすぎていた。いまさら陣笠でもあるまいけんの、久雄に望みやあ、継がすったい——こういつて中学生の私に精神的な負担を押しつけた。

卒業間近になって自分の意志を継いで政治家への道を進んでくれると思い込んでいた息子から、実は動物学者になりたいのだからと打明けられた時、さすがにがっくりしたようだったが、従兄の口添えもあって、子煩悩な父は不承不承ながら私の志望を許してくれた。しかし、それには条件があって、もし亡いたら来年は父の意志通り文科を受けるということだった。私が親もとを遠く離れたかった理由の一つには、時々、頭をもたげてくる父の政治への執念から逃れてのびのびと暮したかったからでもある。

その時は高安犬のことは勿論、日本犬の知識すらろくになかった。今でこそ日本犬はシェパードやスピッツ同様ごくありふれた犬種になっているが、その頃は立耳巻尾の日本犬の姿を見るのも珍しく、東京でその絶滅を憂慮した二、三の識者達によって保護会を作ろうという動きが見えていたに過ぎなかった。

私はどうやら無事に入学する事が出来た。

ある日のこと、土地の新聞に老婆が山犬の群に襲われて、噛み殺されたというニュースが載った。狼や山犬が人を襲うという話は少年時代愛読した立川文庫たちかわなんかでは見た記憶があったが、新聞で読むのは初めてで、それだけに生々しい実感があった。山犬なんてほんとにいるのか

な、私は動物学の教師に質してみた。教師は、

「昔はいたらしいが……いまはどうかねえ。豺狼さいろうといっても、あれはみな支那の字だから……」

と曖昧に首を捻った。図書室で調べてもハッキリしなかった。私は博物館の従兄に手紙で訊ねた。折りかえし従兄から、山犬というのは日本産の小型の狼のことで、明治三十八年以来捕えられた記録がないところから見ると絶滅したと見るべきだろう。君のいう山犬がほんとうの日本狼なら非常に貴重な資料であるばかりでなく、動物学界の定説を覆くわえす材料なんだが恐らくそれは日本犬の野性化したものに過ぎないのじゃないか、といってきた。

私はその後も新聞に注意を怠らなかったが、山犬のニュースはそれなり断えてしまった。だが私の山犬への関心——ほんとうに絶滅してしまつて、もう一匹も残つてはいないのだろうか——という絶滅した種への愛惜はだんだんと昂たかつていった。

私が山犬の話を二度目に耳にしたのは、二学期の初め、山形市の東南に聳える竜山に野外行軍をした時だった。この山は千四百米ばかりだったが、蔵王山塊ぞうざんくわいの出城とでもいった険しい山だった。土坂、岩波、神尾かんのなど山麓の部落はこのところ毎夜、鶏や山羊が山犬の群に襲襲われるということだったが、彼らは夜更ふけてから来るので誰もその正体を認めた者はなかった。私はその後、何度もこれらの部落を訪れて調査したり、捕獲者に懸賞金をかけたりしたが結局得るところはなかった。

その冬南置賜郡の万世村ばんせいむらで山犬が射たれたというニュースが新聞の端はしに小さく載った事があった。また米沢市内に、明治の頃狼を飼っていたという老人が住んでいると教えてくれた人もあつた。

たが、そのいずれもが行って調べてみると野性化した日本犬に過ぎなかった。

「そうさ、やはり日本狼は絶滅してると見るべきだね。なにも山形ばかりじゃなく、よくあっちこっちで山犬が出ただの狼が現われたという話を聞くけど。それを報告する連中は知識のない猟師や炭焼きなんだから正確さがないんだよ」

正月休みに従兄を訪問して報告すると彼はそういつて笑った。結局、私はやはり日本狼の絶滅を認めないわけにはいかなかった。

私に日本犬への眼を開かせてくれたのは学友の尾関だった。三学期に入って間もなく、教室のスチームに当たっている私に尾関は話しかけてきた。彼は私が学友会雑誌に掲載した『山形県下に於ける山犬残存説の実態』という報告を興味をもって読んだと語り、

「だが、君は日本犬には興味はねえのかス」

と聞いた。尾関は米沢の大きな醸造家の跡取りだったが、酒造りの家業を嫌って高等学校の理科にやってくるようになっていた。彼の目標は北大の農学部だった。彼が日本犬の愛好家であることを私はこの時はじめて知った。私は、しかしこの頃はまだ犬にはそれほど興味を持ってはいなかった。

雪国である山形は、三学期は白の世界と化した。好きな山歩きを封じられて退屈していた私は尾関に誘われるままに、ある日、あまり気乗りしなかったが秋田犬を見に行つた。

日本犬というものを意識して見たのはこの時が初めてだった。ポインターやシェパードやその他の優美な外国犬しか知らなかった私はこの重厚な北国の犬の雄大さに打たれた。

「ウーン、こいつあ凄え！」

私は思わず唸った。

帰りの雪道で尾関は日本犬の優秀性について雄弁にしゃべった。私の日本犬への関心はこの時から始まったといえる。日本狼に対する探究欲はいつしか日本犬へと移って行ったのだった。

梅、桃、桜と一度に咲き出す北国の遅い春がくると私はこんどは日本犬を求めて歩き回った。

山形市を中心として私の犬探しの範囲は郊外から次第に地方へと波紋のように拡がっていった。

「もう君の方が俺より日本犬のこと、ズツと詳しくなったんでねえかス」

尾関は私が手帳に、どこの町で何頭、ここの村に何頭と書き込んで、県下の日本犬の犬籍簿を作っているのを見てこういった。

間もなく東京に日本犬保護協会が発足した。私は早速入会した。やがて送られてきた会員名簿で私は山形市内にもう一人、同好者があることを知った。その人は木村屋というパン屋の主人だった。木村屋さんは三十五、六の背の低い、ズングリとした赤ら顔の人で、元はこのパン屋の店員だったが、その働き振りが先代の眼にとまって養子になったのだということだった。だが私の見たところでは凡そ商人に似つかわしくなかった。彼の部屋は彼の商売とは縁のない難かしい本でぎっしりと埋っていて、彼がなかなかの勉強家だということが判った。右翼や左翼の連中とも往来があつて、警察からも眼をつけられている人物だという噂もあったが、彼は私たち——私と尾関——にはそういう気配は少しも見せなかった。私たちはただ日本犬を中心として木村屋さん

と親しくなっていた。

夏休みが近づいたころ、尾関が私と木村屋さんを米沢に行ってみないかと誘った。

「米沢の傍に高畠というど、あんのよう。おらん達、子供おぼこン時分にや高安犬のええのがなんぼもいだもんだ。いまあ純粹な奴は絶滅してなくなったべげんど、奥の方サ行ってみツとええのがあッかもしんねエからよ」

と彼はいった。高安犬——それがどんな犬だか私は知らなかったが、絶滅に瀕している犬種という言葉は私の胸に強く響いた。

私たちは灼けつくような炎天下を何度も米沢に出かけた。が、その甲斐はなかった。僅かに最後の行こゝろの時、万世街道の茶屋で一頭と二井宿町の銀行で一頭、純粹に近い高安太を見つけ得たに過ぎなかった。しかしその二頭とももうよぼよぼの老犬で仔犬を取る術すべもなかった。

歸りの汽車の中で木村屋さんと尾関とは、

「やッぱりいまあ、高安は駄目になったんだなア。純粹な血なんて残っていッこあんめえちゃ」と犬探しを中止するといひ出した。だが私は一人でも続けようと強く決心した。十数年前まで残っていた純粹の血はきつとどこかの奥にまだ残存しているに違ひない。そう信じたかった。

中型犬であり乍ら秋田犬のようにどっしりとした落ちつきを見せた重厚な風貌が、それは今日始めて見たよぼよぼの老犬にさえ十分にうかがわれ、私に諦めきれない愛惜を抱かせたからに違ひなかった。

夏休みも終り、二学期が始まった。もう尾関も木村屋さんも一緒に来なかったが、私は根気よく犬探しを続けた。

偶然、私は二井宿の木樵きこいから和田村の奥にいい地犬じいぬ——高安犬のことを土地の人たちはこう呼

んでいた——がいと聞かされた。木樵はしかしその犬は獵師またぎの犬だからちよつとやそつとでは手放さないだろうと言ひ足した。手に入れるとか入れないということは第二の問題だった。若い優秀な高安犬が見られるという興奮で、私は夢中になって自転車のペダルを踏んだ。

二

和田村は吾妻連峰あづまづみが蔵王山塊ざおうと出合う鞍部の山懷にがつしりと抱き込まれた山村だった。村からは晴れた日には左に遠く雄大な飯豊山いひでさんが眺められ、吾妻の尾根がこれに続いていた。その尾根は栗子山、駒ヶ岳、豪士山となつて和田村の背後に迫り、右手は野猿が群棲する稲子峠が竜ヶ岳の肩に連なり、その向うに蔵王、竜、雁戸がんとの峰々、遠くに朝日連峰が磨ぎすましたような佇たたずまいを見せていた。

山懷に抱かれたというよりは山脈やまなみに突き刺さつたような、細長いこの村は田も畑も狭く、どの農家も畳のない黒ずんだ板敷の部屋でうす暗く、低い、冷え冷えとした軒が陰鬱に娘を売る県の悲しみを滲みこませていた。

ここでは雪は早くきて遅くまで残った。そして深かった。

村人たちは殆どが半農半獵で、雪に閉じ込められた長い期間を熊を追ひ、狐を狩り、兎を捕えて暮していた。

二学期に入つたばかりで残暑はまだ酷きびしかったが、この辺りあたは山が迫っている故せいか、それほどには感ぜられなかった。

「オーイ、このあたりサ、地犬、えねエがス？」

畦に遊ぶ児童たちを見つけては声を掛けたが、都会人を見たことのない彼らはただポカンと私を見詰めるだけだった。畑にいる百姓に訊ねても彼らは犬などには少しも関心を持っていなかった。

「地犬かあ、いっぱいいんぜス」

とこともなげにいうのもあれば、親切に、

「ホだなあ、菊ンどこサ居ンでねエがな。なアレ、菊の子供だらよぐ引ッ張ッてんぜえス」

と大声で隣りの畑に聞いてくれる者もあったが、いずれにしても信頼のおける返事はなかった。ぬかる路を自転車を押したり、担いだりでふうふういい乍らあっちの外れ、こっちの片隅の農家を訪れて何頭かの犬を見て回ったが、それはどれも私が米沢や高畠で見た以上のものではなかった。

やっぱり話だけか——いつものこととは云え、氣負いこんだあとの疲れで私は力なく米沢へ自転車を走らせた。

陽は沈もうとして駒ヶ岳から豪士山にかけて湧き上っている入道雲の頂をあかあかと染めていた。

しばらく行くと田圃道を向うから、夕陽をカッと一ぱいに浴びて獵師風の長身の男が一頭の白い犬を連れてやってくるのに出遇った。

立派な犬だった。ピンと立った耳、犬張子のように張った胸、逞しく巻き上った尾、キッと正